1. ミツバツツジ類の系統解析

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 池上, 宙志 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/47811

[植物園利用報告]

1　ミツバツツジ類の系統解析

ツツジ属（*Rhododendron*）は，ツツジ科最大の属で，世界中に1,000種近くが見られる非常に大きな属である。このツツジ属は，花芽と葉芽の区別の有無，子葉のタイプ，葉のたたまれ方，種子の付属体の形態，腺毛の形態などから，さらにいくつかの亜属に分けられる。しかし，属内の系統関係について様々な見解があり，未だコンセンサスが得られていない。ミツバツツジ類は，このツツジ属の中でも日本を中心に分化したグループであり，花芽と葉芽の区別がない混芽をもち，枝先に3枚の葉が偽輪生することで外部形態的にもよくまとまったグループである。これまでに提出されているツツジ属の分類体系から，ミツバツツジ類の範囲として問題になるのは，以下の2点である：(1)常緑のサクラツツジを含めるかどうか。(2)葉が5枚偽輪生するクロフネツツジとシロヤシオを含めるかどうか。またその他にも，花芽の大きさや腺点の有無により，ミツバツツジ類内をいくつかのグループに分けることが出来るが，グループ内の系統関係は未だ明らかにされていない。そこで本研究では，ミツバツツジ類の範囲およびグループ内の系統関係を明らかにするために，遺伝子間領域の合計約2,000bp を用いて系統解析を行った。

その際，材料となるツツジ科植物の一部を，赤城自然園の倉重氏より譲り受け，植物園内で栽培した。栽培している株の総数は67個体である。その結果，多くの研究者によってミツバツツジ類に分類されてきたクロフネツツジおよびシロヤシオは，他のミツバツツジとは単系統にならないことが分かった。この2種を除くミツバツツジ類は単系統となり，ヤマツツジ類と姉妹群を形成した。グループ内の系統関係については，花芽の大きさにより識別される2つのクレードに分かれた。また，常緑性のサクラツツジは，落葉性のミツバツツジの中に含まれた。さらに，外部形態から30種以上に分類されるミツバツツジ類の大半は，本研究で用いた領域では1塩基の違いもみられず，変異の見られたものについても，このクレード内全体での塩基置換数は非常に少ないことから，このグループが急速に種分化をおこしてきたことがうかがえる。

本研究の成果は，日本植物分類学会第28回大会（1998年3月　富山）および日本植物学会第62回大会（1998年9月　広島）にて発表した。

（池上宙志　金沢大学大学院自然科学研究科）

2　樹木実生の形態記載

樹木の生活史上，種子の散布から発芽～実生の定着までの時期は最も死亡率の高い段階であり，森林の種構成や樹木の空間分布にも大きな影響をあたえる重要な段階である。このことから近年，樹木実生の定着様式に関する研究が盛んに行なわれるようになってきた。しかし野外で発生した多様な樹種からなる実生の同定は難しく，かなりの経験と知識が要求されることから，当年生実生の同定に役立つ図鑑が必要とされる。また樹木実生の定着様式はその形態と密接な関係があり，この点からも詳細な実生形態の記載を基礎とした形態学からのアプローチが必要と考える。このようなことから筆者は，日本産樹木の実生形態の研究を行っている。研究に用いる標本は，野外で採集した種子を植物園のガラス室ならびに屋外で播種管理している。

これらの結果については，これまでの結果とあわせて以下の通り発表した。